

- 1 . ついで主はモーセに告げて仰せられた。
- 2 . 「銀のラッパを二本作らせよ。  
それを打ち物作りとし、あなたはそれで会衆を召集し、また宿営を出発させなければならない。
- 3 . この二つが長く吹き鳴らされると、全会衆が会見の天幕の入口の、あなたのところに集まる。
- 4 . もしその一つが吹き鳴らされると、イスラエルの分団のかしらである族長たちがあなたのところに集まる。
- 5 . また、あなたがたがそれを短く吹き鳴らすと、東側に宿っている宿営が出発する。
- 6 . あなたがたが二度目に短く吹き鳴らすと、南側に宿っている宿営が出発する。  
彼らが出発するには、短く吹き鳴らさなければならない。
- 7 . 集会を召集するときには、長く吹き鳴らさなければならない。  
短く吹き鳴らしてはならない。
- 8 . 祭司であるアロンの子らがラッパを吹かなければならない。  
これはあなたがたにとって、代々にわたる永遠の定めである。
- 9 . また、あなたがたの国で、あなたがたを襲う侵略者との戦いに出る場合は、ラッパを短く吹き鳴らす。  
あなたがたが、あなたがたの神、主の前に覚えられ、あなたがたの敵から救われるためである。
- 10 . また、あなたがたの喜びの日、あなたがたの例祭と新月の日に、  
あなたがたの全焼のいけにえと、和解のいけにえの上に、  
ラッパを鳴り渡らせるなら、あなたがたは、あなたがたの神の前に覚えられる。  
わたしはあなたがたの神、主である。」
- 11 . 第二年目の第二月の二十日に、雲があかしの幕屋の上から離れて上った。
- 12 . それでイスラエル人はシナイの荒野を出て旅立ったが、雲はパランの荒野でとどまった。
- 13 . 彼らは、モーセを通して示された主の命令によって初めて旅立ち、
- 14 . まず初めにユダ族の宿営の旗が、その軍団ごとに出発した。軍団長はアミナダブの子ナフシオン。
- 15 . イッサカル部族の軍団長はツアルの子ネタヌエル。
- 16 . ゼブルン部族の軍団長はヘロンの子エリアブ。
- 17 . 幕屋が取りはずされ、幕屋を運ぶゲルシオン族、メラリ族が出発。
- 18 . ルベンの宿営の旗が、その軍団ごとに出発。軍団長はシェデウルの子エリツル。
- 19 . シメオン部族の軍団長はツリシャダイの子シェルミエル。
- 20 . ガド部族の軍団長はデウエルの子エルヤサフ。
- 21 . 聖なる物を運ぶケハテ人が出発。彼らが着くまでに、幕屋は建て終えられる。
- 22 . また、エフライム族の宿営の旗が、その軍団ごとに出発。軍団長はアミフデの子エリシャマ。
- 23 . マナセ部族の軍団長はペダツルの子ガムリエル。
- 24 . ベニヤミン部族の軍団長はギデオニの子アビダンであった。
- 25 . ダン部族の宿営の旗が、全宿営の後衛としてその軍団ごとに出発。軍団長はアミシャダイの子アヒエゼル。
- 26 . アシェル部族の軍団長はオクランの子バグイエル。
- 27 . ナフタリ部族の軍団長はエナンの子アヒラ。
- 28 . 以上がイスラエル人の軍団ごとの出発順序であって、彼らはそのように出発した。
- 29 . さて、モーセは、彼のしゅうとミデヤン人レウエルの子ホバブに言った。  
「私たちは、主があなたがたに与えられた場所へ出発するところです。  
私たちといっしょに行きましょう。」

私たちはあなたをしあわせにします。

主がイスラエルにしあわせを約束しておられるからです。」

30 . 彼はモーセに答えた。

「私は行きません。

私の生まれ故郷に戻ります。」

31 . そこでモーセは言った。

「どうか私たちを見捨てないでください。

あなたは、私たちが荒野のどこで宿営したらよいかご存じであり、私たちにとって目なのですから。

32 . 私たちと一緒に行ってくださいれば、主が私たちに下さるしあわせを、あなたにもおわかちしたいのです。」

33 . こうして、彼らは主の山を出て、三日の道のりを進んだ。

主の契約の箱は三日の道のりの間、彼らの先頭に立って進み、彼らの休息の場所を捜した。

34 . 彼らが宿営を出て進むとき、昼間は主の雲が彼らの上にあった。

35 . 契約の箱が出発するときには、モーセはこう言っていた。

「主よ。立ち上がってください。

あなたの敵は散らされ、あなたを憎む者は、御前から逃げ去りますように。」

36 . またそれがとどまるときに、彼は言っていた。

「主よ。お帰りください。

イスラエルの幾千万の民のもとに。」

## 説教

民数記 10 章では、いよいよ約束の地カナンを目指してシナイ山を旅立つイスラエルの様子が描写されます。イスラエルはエジプトを出て三ヶ月目にシナイ山に到着し(出ヅヅト 19:1)、それから約一年間シナイ山にとどまりました。

まず、進軍のラッパについて教えられます。通常は雄羊の角でできたものを用いますが、ここでは銀でできた打ち物作りのラッパが二本用いられます(民数記 10:2)。二本が長く吹き鳴らされると全会衆が集合します(3)。一本だけ長く吹き鳴らされると族長たちが集まります(4)。そして、短く吹き鳴らされると宿営を畳んで順に出発します(5-6)。ラッパを吹くのは祭司です(8)。ラッパは戦闘の際にも吹き鳴らされ、さらには「喜びの日」である安息日、「例祭と新月の日」に、いけにえをささげながら吹き鳴らされました(9-10)。ラッパは人々の目を覚ますようなかん高い音を響かせます。それは平凡な日常生活を切り裂く天からの音色と言うべきもので、神の到来と臨在と新たな時代を知らせました。ラッパの音を聞くと、人々は日常生活にどっぷり漬かった心を一気に天へと向けます。召集の場合には、神の指示を仰ぎます。進軍の場合には、ラッパの音に神の臨在を確信し、カナンでの新しい生活を夢見て鼓舞されます。いけにえの場合には、ラッパの音に神の愛と永遠の救いを確信して喜び満ちたことでしょう。このように、祭司の吹き鳴らす神のラッパは、神の到来と臨在と新たな時代をイスラエルの人々に告げ知らせたのです。

こうして、「第二年目の第二月の二十日」、いよいよイスラエルの全軍はシナイ山を出発します(11)。順序正しく、しかも幕屋の上から離れた神の雲に従い、「モーセを通して示された主の命令によって初めて旅立」ったのでした(12-13)。その際、レビ人の三氏族は 12 部族の間に挟まる形で進みます。最初の三部族の後に重い「幕屋」を荷車に乗せて運ぶゲルシオン族とメラリ族が続き、さらに三部族の後に「聖なる物」を運ぶケハテ族が進んで「彼らが着くまでに、幕屋は建て終えられる」よう配慮されました(14-21)。「契約の箱」を運ぶのはケハテ族の役割で、彼らは通常 6 部族の後ろ、つまり 12 部族の真ん中であって行進しましたが、行進の際には「契約の箱」は全イスラエルの「先頭に立って進み」ました(33)。

出発するにあたって一つのエピソードが紹介されます。荒野を旅して行くに際して、モーセは義兄弟ホバブに協力を要請します。「私たちは、主があなたがたに与えると言われた場所へ出発するところです。私たちと一緒に行きましょう。私たちはあなたを

しあわせにします。主がイスラエルにしあわせを約束しておられるからです。」(29)しかし、ホバブはこれを断ります。「私は行きません。私の生まれ故郷に帰ります。」(30)これに対し、モーセはさらに説得を試みます。「どうか私たちを見捨てないでください。あなたは、私たちが荒野のどこで宿営したらよいかご存じであり、私たちにとって目なのですから。私たちといっしょに行ってくださいれば、主が私たちに下さるしあわせを、あなたにもおわかちしたいのです。」(31-32)「どうか私たちを見捨てないでください」と、遊牧民として誰よりも荒野を知り尽くした、言わば荒野の専門家である義兄弟に助けを求めたくなるモーセの気持ちもわかります。なぜなら、彼らは見渡す限り何も無い不毛の荒野を旅していくことになるからです。食べ物もなく飲み水もない中で、総勢二百万のイスラエルの民は荒野を旅していかなければなりません。「主がイスラエルにしあわせを約束しておられる」とはいえ、行けども行けども「荒野のどこで宿営したらよいか」もわからぬ状況を何とかしなければなりません。結局、ホバブがモーセの説得に応じてイスラエルに同行したかは書いてないのでわかりません。後に、ホバブの子孫がイスラエル人と一緒にカナンで生活していたことが士師記に記述されているので、あるいはホバブがモーセの説得に応じたのかも知れません(士師記 1:16,4:11)。

しかし、いずれにせよ、民数記の記者は次のように総括します。「こうして、彼らは主の山を出て、三日の道のりを進んだ。主の契約の箱は三日の道のりの間、彼らの先頭に立って進み、彼らの休息の場所を捜した。」(民数記 10:33)これによると、イスラエル全軍の「先頭に立って進み、彼らの休息の場所を捜した」のはホバブではなく「主の契約の箱」です。つまり、イスラエルの神ご自身が、彼らの先頭に立って進み、彼らの休息の場を捜して彼らを休ませたのでした。勿論、この場合、ホバブが彼らと共にいるとアドバイスをしたかも知れません。それでイスラエルもあれこれと助かったことでしょう。でも、どのような人間的な助けがあったにせよ、最終的にイスラエルを守り、助け、導いたのは、他ならぬ彼らの神ご自身であったと証言されているのです。さらに、次の節では次のように付け加えられます。「彼らが宿営を出て進むとき、昼間は主の雲が彼らの上にあった。」(34)前の 9 章で言われていた通り、イスラエルは人間の指図によって前進したのではなく、「主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立」ちます。神の雲と共に宿営し、神の雲と共に出発しました(9:17-23)。

モーセの義兄弟ホバブはミデヤン人です。ホバブ自身とは直接関係はありませんが、ミデヤン人はこの後モアブと結託してイスラエルを呪う計画に加わり(22-24 章)、これが失敗すると、今度は色仕掛けでイスラエルを偶像崇拜へと誘惑する「ベオルの事件」を引き起こすので、神がミデヤン人への報復を命じているほどです(25 章、31:1-20)。もっとも、神の働きのために召されたレビ人であってもコラのようにイスラエルを墮落させる者もいます(16 章)、そうかと思えば、貪欲で呪われた異教の占い師バラムの様な者であっても、神の霊が降って真実を語る場合もあります(23:7-10,18-24, 24:2-9,15-24, 1 王 2:15,19 11)。いずれにせよ、どんなに優れた人間のアドバイスもよく吟味してそれが真実かどうかを正しく判断しなければなりません。

こうして、イスラエルは「主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立」ちます。人を頼らず、ただ神だけを頼って前進しました。イスラエルの神ご自身が彼らの先頭に立って進んで行かれます。それで、神の雲が移動し、人々の先頭に立つ「契約の箱」が出発する時、モーセは言います。「主よ。立ち上がってください。あなたの敵は散らされ、あなたを憎む者は、御前から逃げ去りますように。」(民数記 10:35)この文字通りの訳はこうです。「主よ。立ち上がってください。(そうすれば)あなたの敵は散らされ、あなたを憎む者はあなたの顔の前から逃げ去ります。」イスラエルの神が立ち上がる時、神に敵対する勢力は散らされ、逃げ去ります。そうして、敵対するあらゆる勢力を粉碎し、不毛な荒野を越えて、神が約束された祝福の地カナンへと導いてくださいます。これはイスラエルが自分勝手に仕掛けるどんな戦いにも勝利するというわけではありません。そうではなく、イスラエルが神の約束を信じ、「主の命令」に従ってカナンに向かって前進していくならば、それを邪魔するあらゆる妨害を神さまが打ち破ってくださるという意味です。なぜなら、これは主の戦いであるからです。イスラエルの戦いというよりは主の戦いです。イスラエルが主を信じず主に従わないならば、彼らが主に敵対する「敵」となって打ち砕かれます。でも、彼らが主の約束を信じて主に従うならば、主が彼らと共におられます。主が彼らの戦いを戦ってくださいます。彼らは、武器もなく、食糧も持たない、しかも烏合の衆です。パレスチナの文明国から見たら、まるで何も無い乞食の集団です。数だけは二百万もありますが、はっきり言って、いつ討ち死にするか、あるいは野垂れ死にするか、全くわからない人々です。今は生きていますが、一寸先は闇です。毎日毎日が戦いです。行く先々で、パレスチナ諸国との戦いが待ち受け、日々の糧を得る戦いが待ち受けています。でも、そのすべての敵を神さまが打ち破ってくださいます。神が「立ち上がって」あらゆる敵を粉碎し、彼らをカナンに向けて前進させてくださいます。彼らが神の約束を信じ、「主の命令」に従ってカナンを目指すならば、神が全面的に彼らを助けてくださいます。ただし、それはイスラエルが「主の命令によって」

歩んでいる限りに於いてです。彼らが神の約束を信じて「主の命令」に従うならば、神が全面的に彼らを助けてくださいますが、そうでなければ助けてくださいません。どんなに人間的に優れた力を持っていても、主に従わないならば神の助けはありません。イスラエルの本当の戦いは、この神を信じて神に従うかにこそありました。戦いに勝つか負けるかは、人によらずただ神によります。イスラエルの本当の戦いは、ひとえにその神を信じて神に従うかにこそありました。